

7月13日(日) マルコの福音書10章1～12節

「だれでも、自分の妻を離縁し、別の女を妻にする者は、妻に対して姦淫を犯すのです。」(11節)

---

1節を見ますと、群衆がイエスのもとに集まって来たので、再びいつものように彼らを教え始められたイエスに対して、パリサイ人たちがやって来て、イエスを試みるために、夫が妻を離縁することは律法にかなっているかどうかを議論しました。私たちは、なぜ突然パリサイ人たちがイエス様に離縁のことを尋ねたのだろうかと思いますが、これには理由がありました。マルコの福音書6章17～29節をもう一度ご覧いただければと思いますが、ヘロデヤは、自分の身の安全を計るために夫のもとを去り、そのヘロデヤをヘロデ・アンティパスが受け入れて、もとの妻を離縁し、ヘロデヤを妻にしていました。もしここでイエスが離縁に反対するなら、イエスのことをヘロデ・アンティパスに告げ、イエスを捕えることができると思ったのでしょうか。またイエスが、ヘロデ・アンティパスの離縁を支持すれば、律法違反で告発しようと考えたのです。

夫が妻を離縁することは許されるかどうかということに関して、イエス様は「モーセはあなたがたに何と命じていますか。」(3節)と尋ねられました。それに対して彼らは「モーセは離縁状を書いて妻を離縁することを許しました。」(4節)と答えました。これは、申命記24:1「人が妻をめとり夫となった後で、もし、妻に何か恥ずべきことを見つけたために、気に入らなくなり、離婚状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせ」の箇所を指していると考えられます。それに対してイエス様は「モーセは、あなたがたの心が頑ななので、この戒めをあなたがたに書いたのです。」(5節)と言われました。ここで言われている「心が頑な」ということに関して、まず一つが神様に対して心が頑なであるとの意味に解釈できます。つまり神様のみこころというよりも、自分たちの都合を優先させるという意味で心が頑なであるということです。二つ目が男が妻である女性のことを気にいらなくなってしまう場合には、その女性に対して心を頑なにしておき、つらくあたる可能性があります。それで女性を救済する意味でモーセはこのような命令を書いたということです。

さらにイエス様は離縁の正当性を論じるのではなく、6節から人類の創生の始めに神が定められた結婚の意味を問います。つまり神ご自身は人類を創造した時には決して結婚した男女が離婚をするということは認めていなかったということです。むしろ人類の罪の結果として、また人の心の頑なさによって仕方なく離婚を認めざるを得ない結果となってしまったのです。そして結婚が男と女を結び合わせて一体となるとの神のみこころを考え合わせれば、離婚という考えは出て来ないはずで

さらにイエス様はこの問題について尋ねた弟子たちには「だれでも、自分の妻を離縁し、別の女を妻にする者は、妻に対して姦淫を犯すのです。妻も、夫を離縁して別の男に嫁ぐなら、姦淫を犯すのです。」と言われました。ここでイエス様は、不当な離縁を厳しく戒めつつ、そのような離縁は姦淫の罪に等しいことを語ります。このことは、同時にヘロデ・アンティパスとヘロデヤのことを言おうとしているとも取ることができます。

キリスト教会においても離縁が是か非か、また何か事情があれば教会は離縁を認めるべきではないかということが議論されるようになってまいりました。しかし私たちはまず離縁について考えるよりも、イエス様が言われたように結婚の意味を深く考え、結婚が教会において決して軽んじられることなく、尊ばれ、結婚が周りへの良き証しとなることを考えるべきでしょう。

7月14日(月) マルコの福音書10章13～16節

「まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」(15節)

---

「さて、イエスに触れていただこうと、人々が子どもたちを連れて来た。」(13節)とありますが、イエス様に手を置いていただいて、祝福をしてもらうために親が子どもたちをイエスさまのもとに連れて来たのでしょう。ところが弟子たちは彼らをしかったのです。その理由の一つが、以前も書きましたが、子どもたちは世間では軽く見られていました。ですから他の人々がイエス様のもとに来る妨げになると思ったのでしょうし、弟子たちは、子どもたちに対する祝福など意味がないと思ったのかもしれない。

しかしイエス様は、まず弟子たちのしていることに対して憤られました。イエス様の憤りは衝撃的です。つまり、イエス様は弟子たちのしていることに対して憤られるほどに、子どもたちを愛し、祝福しようとしておられたということです。そして、16節でイエス様は子どもたちを抱くほどの愛をもって、彼らの上に手を置いて祝福されたのです。私も、礼拝の最後の祝祷の時に、このイエス様のお姿を常に思いながら、「格別に子どもたちの上に」と、子どもたちの上に神の豊かな祝福を宣言させていただいています。

「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国は、このような者たちのものなのです。」(14節)と言われました。つまり子どもたちにこそ神の国はふさわしいということです。ですから私たちはあらゆる努力や方法、知恵を尽くして子どもたちをイエス様のもとにお連れしなければなりません。少なくとも邪魔するようなことを決してしてはなりません。そして、このことはまさに子どもを託されている親と教会の責任と言えます。そして私たちも弟子たちと同じように、子どもたちがイエス様のもとへ行くことを妨げる危険性が大いにあります。例えば、子どもだから聖書のみことばや福音を理解できないだろうなどと考えてしまいがちです。しかしそうであればイエス様は私たちに対しても激しく憤られることでしょう。私たちは、ただイエス様のことばに従って子どもたちをイエス様のもとにお連れするべきであって、邪魔してはならないのです。

「子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」(15節)と言われました。子どもは自分の能力や功績を主張することはしません。むしろ自分の無力さや小ささを自覚し、他の大人に頼って生きていこうとします。それと同じように神の国に入るためには、自らの小ささや無力さを自覚し、ただ神によりすがっていく謙遜さこそが神の国には必要です。そして神の国に入ることができることを神よりの恵みの賜物としてただ子どものように感謝して受け取ることが求められています。善行も何も必要ありません。神は、わが子を愛するように私たちを愛してくださり、私たちのためになすべきことをすべてをしてくださって、受け入れるだけで神の国に入れるようにしてくださったのです。恵みとしての神の国に属する幸いを得ていることを心より感謝いたしましょう。

7月15日(火) マルコの福音書10章17～22節

「あなたに欠けていることが一つあります。帰って、あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」(21節)

---

この人は永遠のいのちを求めてイエス様のところへやって来ました。彼は、イエス様のもとへ走り寄って、御前にひざまずき、イエス様を「良い先生」と呼んで敬っていることから、彼の求めが非常に真剣であったことが分ります。もしかすると、彼は永遠のいのちを得ようと律法を守り行ってきたのかもしれませんが、どこまでいけば永遠のいのちを得ることができるのかとの確信がなかったということなのでしょう。ですから、イエス様から、あなたは永遠のいのちをすでに獲得していますとの宣言か、どうすれば永遠のいのちを得られるのかという指南のようなものを求めていたのかもしれませんが。

それに対してイエス様は「なぜわたしを『良い』と言うのですか。良い方は、神おひとりのほか、だれもいません。」と言われました。これは、イエス様が良い方ではないということではなく、イエス様は、この人に天におられる神ご自身に目を向けさせようとしたのだらうと思わされます。

イエス様が19節で従うべき戒めをお示しになられました。すると、彼は「先生。私は少年のころから、それらすべてを守ってきました。」(20節)と言いました。もちろん神の戒めを完璧に守ることのできる人はいません。神の目から見ると、善を行う人はひとりもいないのです。(ローマ人への手紙3章12、23節)もし自分が神の目になうことを行っていると思うのであれば、それは思い込みとしか言えないのです。そのような彼にイエス様は「あなたに欠けていることが一つあります。帰って、あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」と言われました。(21節)これは、クリスチャンは決して財産を持つてはいけないと言われたものではありません。ここでイエス様が問題にされたのは、この青年が戒めを小さい時から守っておりますと言った、その守り方です。つまりこの青年がいかにも戒めを表面的に、不完全にしか守っていなかったかを教えようと言われたのです。それと同時に、富を持つことの中に潜む貪欲の罪があり、富に頼るのではなく神に頼ることと、全財産を売り払って貧しい人に施す隣人愛を示しつつ、すべてを捨ててイエス様に従うことを求められたのです。私たちがイエス様に従っていると思っても、いかに不十分な従い方しかしていないかが、よく分かります。そのような私たちに対してイエス様は、みことばをもって厳しく服従を求められることがあります。しかし、イエス様は私たちを見つめ、いつくしんで言われるのです。それは、私たちをさらに祝福された道へと導くためです。謙遜に自らの信仰を吟味しながら、まだ従いきれていないところを捨てて、イエス様に従って歩む者でありたいと思わされます。

私たちが、イエス様のもとに来たこの人のように、永遠のいのちについて誤解していることはないでしょうか。まず始めに、永遠のいのちは神からの恵みの賜物であって、何かをすることで得られるものではありません。また、永遠のいのちは、ただ単に将来天の御国へ入ることを保証するものではありません。むしろ、救いを通して神との豊かな交わりが回復されたことで、そのような交わりに入れられていることも永遠のいのちの一部です。私たちにも救いにより永遠のいのちが豊かに与えられていることを主に心から感謝しましょう。

7月16日(水) マルコの福音書10章23～27節

「それは人にはできないことです。しかし、神は違います。神にはどんなことでもできるのです。」(27節)

---

永遠のいのちを求めてきた青年が立ち去った後、イエス様は弟子たちに「富を持つ者が神の国に入るのは何と難しいことでしょう。」(23節)と言われました。このことばは弟子たちを驚かせました。なぜなら、彼らの考えによれば、金持ちは神の祝福をより多く受けている証拠なので、彼らは神の国に近い存在だと思っていたからです。しかしここで私たちは同じ10章の13～16節で語られたイエス様の神の国に関することばを思い出すべきです。つまり神の国は子どもたちのように無力になって、ただ神からの恵みをそのまま受け取る者たちにこそふさわしいということです。しかし永遠のいのちを求めてきた人は、多くの財産を含め、すべてを捨てて無力な状態で神の国を受け入れることができず、むしろこの世の富に頼ろうとしました。結局、富は人に自己満足を与え、地上のものに固執させ、神様に頼るのではなく、富と自分自身に頼る気持ちを起こさせるのです。そうすると、神の国とはほど遠い存在となってしまうのです。ですからイエス様は「金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」と言われました。もちろんらくだが針の穴を通ることはできませんので、そのくらい難しいということイエス様は言おうとされたのです。イエス様のもとに来たこの多くの財産を持つこの人がなすべきことは悔い改めでした。しかしこの人は悔い改めて、イエス様に従うことができず、顔を曇らせ、悲しみながらイエス様の前から立ち去りました。そう考えると、富を持つ者が悔い改めて神の国に入ることは何と難しいことかと思いますが、27節で「それは人にはできないことです。しかし、神は違います。神にはどんなことでもできるのです。」と言われました。まず一つですが、人は神の国に入ることについては無力です。自力で神の国に入ることはできませんし、人を神の国に導くことはできません。それとは対照的に、神にはどんなことでもできます。まず神は恵みによって人を神の国に入ることができるようになりました。それとともに、神は富を持てる者が、神の国に入ることができるようになります。つまり、神が豊かにその人の内側であったり、人生に介入して下さることで、この世のものではなく、神の国を求め始めたり、謙遜に神の国に入ることを信仰をもって受け入れるようにされます。そして、私にはできないと、自分の無力さを知らされた者がするのは神に祈ることです。祈らない信仰者は、自分の無力さを知らないか、もしくは自分の弱さを教えられていないクリスチャンです。自然に祈りの手が上がるまで自分の無力さを主に知らせていただきましょう。

7月17日(木) マルコの福音書10章28～31節

「わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者は、今この世で、迫害とともに、家、兄弟、姉妹、母、子ども、畑を百倍受け、来たるべき世で永遠のいのちを受けます。」(29、30節)

---

28節でペテロは「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」と言います。永遠のいのちを求めてきた青年とは違うというところを見せようと思ったのかもしれませんが、実際に自分は漁師という仕事も、また家族も残してイエスに従ったということアピールしたかったのかもしれませんが。しかし、ペテロの言葉の裏には、何か彼の思惑のようなものが見え隠れします。それは、何もかも捨ててイエスに従った見返りを求める気持ちです。私たちも、純粋にすべてを捨ててイエス様に従う信仰をもって歩み始めても、どこかでこんなはずではなかったというような思いに駆られることはないでしょうか。どこまでも、また何があっても主に従う信仰を持ち続けたいと思わされます。

それに対してイエス様は「わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者は、今この世で、迫害とともに、家、兄弟、姉妹、母、子ども、畑を百倍受け、来たるべき世で永遠のいのちを受けます。」(29、30節)と言われました。まずイエス様は、「わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者は、今この世で、迫害とともに」と言われ、イエス様に従うならば、この世にあっては迫害があることを語ります。つまりキリストに従うことは、ペテロが期待しているような喜びにあふれたものではなく、むしろ苦難の道となるということです。しかしそのような迫害の苦難の中にあっても、「家、兄弟、姉妹、母、子ども、畑を百倍受け」というのは、主にある兄弟姉妹たち、また神の家族の豊かな交わりが与えられ、それと同時に、イエス様と福音のためにすべてを捨てて従った者たちは、世は迫害をもって報い、目に見えるかたちでは報いられなくても、主にある兄弟姉妹たちが報いてくださり、主がそのようにして報いられるように導かれるということです。そして、最後に主は来たるべき世において永遠のいのち、すなわち救いの完成をもって御国へ招いてくださることで報いてくださいます。

私たちは、この世のものと永遠のいのちのどちらに価値を置くのでしょうか。永遠のいのちの恵みの価値を知っているのでしょうか。またイエス様と福音のためにすべてを捨てた者を主は決して見捨てることがないと信じているのでしょうか。主は、決してこの世にあって見捨てる方ではなく、来るべき世にあって従う者を忘れる方ではありません。31節のみことばも、様々に解釈されていますが、文脈からは先にいる多くの者とはイエスに従わず、この世の楽しみを求める者たちで、後にいる多くの者とはイエスに従い、この世のものをイエスと福音のために捨てた者たちで、イエス様ご自身がその者たちにまず報いられるということで、後にいる多くの者が先になるということなのでしょう。人の目から見れば、イエスに従うことは迫害を受けるような厳しい中を歩まなければならないような愚かで、後に行く人たちのように思えますが、イエス様の目から見れば、その者たちこそが先になる者となるのです。

7月18日(金) マルコの福音書10章32～34節

「人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは、人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。異邦人は人の子を嘲り、唾をかけ、むちで打ち、殺します。しかし、人の子は三日後によみがえります。」(33、34節)

---

「一行はエルサレムに上る途上にありました。」エルサレムこそイエス様が向かう最終目的地であり、苦難と十字架の死が間近に迫っていることをイエス様もよくご存知でした。ですから、固い決心をもってエルサレムへと進んで行かれたのです。その決意の現われが「イエスは弟子たちの先に立って行かれた。」とのことばの中にも表れていますし、ルカの福音書9章53節には「しかしイエスが御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので」とあります。それとともに昨日も見ましたが、キリストと福音のために、すべてを捨てて、従う者には迫害が必ずあります。それにもひるまず進むべき模範を弟子たちの先に立って進むキリストご自身が示されたとも言えます。

まずイエス様は、祭司長たちや律法学者たちのようなユダヤ人の指導者に引き渡され、そこでイエス様を死刑に定めて、イエス様を異邦人(ローマ人)に引き渡します。彼らにはイエス様を死刑にする権限がなかったからです。そして異邦人は、イエス様をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、十字架にかけて、殺します。イエス様はご自分にとって最悪のシナリオであることはご存知でした。それでもイエス様は、すべてを父なる神様の御手にゆだねたのです。私たちも状況が自分の思っていたようには進んでいけないこともあるでしょう。それどころかますます悪くなっていくこともありえます。ですから、ここで私たちがイエス様にならうべき模範は、それでもなお、最悪をも最善にしてくださる神の御手に信仰をもってすべてをおゆだねするということです。もちろんそれは難しいことでしょう。しかしそのようにできるように自らの信仰が訓練されていくことが必要ではないかと思わされます。もう一つが、イエス様はこの地上に来られた目的をご存知でした。またイエス様は父なる神のみこころに従い通された方でした。ここにも私たちがならうべきイエス様の模範があります。私たちは日々何を目的として生きているのでしょうか。それが神のみこころにかなうことでしょうか。神のみこころにかなう生き方には確信があり、それこそがどんな困難にも打ち勝つ強さを与えるのです。

逆に、弟子たちは驚き、ついていく人たちは恐れを覚えました。(32節) 彼らはイエス様がローマ帝国の支配から自分たちを解放する政治的なメシヤだと思っていましたし、十字架につけられて殺されるとは思っていませんでした。ですから彼らはローマ帝国に対する戦いを想定して恐れたのかもしれませんが。しかしイエス様は弟子たちが考えていたような方ではありませんでしたし、ローマ帝国に対して反乱を起こすどころか、異邦人の手に引き渡されることになっていたのです。私たちも勝手に自分で判断して、恐れたりすることが何と多いことでしょう。またエルサレムへ向かうイエス様と弟子たちの考えに何と大きな違いがあることでしょう。みこころとは全く違うことを想定して、勝手に恐れてしまうことが何と多い私たちでしょうか。

7月19日(土) マルコの福音書10章35～41節

「あなたがたは、自分が何を求めているのか分っていません。わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができますか。」(38節)

---

弟子たちは、イエスがエルサレムへ上って行かれるのを見て、いよいよ栄光の日が近づいてきたと思ったのかもしれませんが。ゼベダイの息子たち、ヤコブとヨハネがイエスのところへ来て、「あなたが栄光をお受けになるとき、一人があなたの右に、もう一人があなたの左に座るようにしてください。」と願い出ます。あなたが栄光をお受けになるときは、イエスがダビデの王座に就き、エルサレムを支配する時を指しています。弟子たちが、イエスに対して間違った期待をしていることを知っておられたので、「あなたがたは、自分が何を求めているのか分っていません。わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができますか。」と言われました。杯は、イエスが全人類の罪をその身に負うがゆえに注がれる神の怒りを指し、バプテスマは、キリストが受けようとしている苦難と死を表しています。どちらも、この後のイエスの十字架の苦難を意味しています。そして自分たちがいかに真剣であるかを示そうとしたのかもしれませんが、「できます」と答える彼らに、「確かにあなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることになります。」と弟子たちが受ける苦難を預言しています。実際に、使徒の働き12章1, 2節を見ますと、ヘロデ・アグリッパ一世により、このヨハネの兄弟であるヤコブが、剣で殺されることとなりました。そしてイエス様は御子として謙遜に、父なる神の権威をお認めになり、栄光は父なる神のみこころによって備えられた人たちに与えられると言われます。(40節)しかし、それを聞いたほかの十人が、ヤコブとヨハネに腹を立て始めました。恐らく、彼らも同じ気持ちだったのでしょう。そして、ヤコブとヨハネに先を越されたと思ったのかもしれませんが。

私たちが、十字架にかかれたイエス様を仰ぎ見る時に、いったい何を思うでしょうか。そのお方に何を願うでしょうか。特に、神が与えようとしておられる苦難を避けようとする時や、イエスに従うことに何の意味があるだろうかと計算する自分を見る時、また周りの兄弟姉妹たちがうまくやっているように思えるのとは裏腹に、まるで自分が貧乏くじを引いたかのように、自分のことをみじめだと思ってしまう時に、私たちはイエス様の十字架を何も分ってないなと思いますし、苦難の後の栄光を全く分っていないことを思われます。聖霊が、そのことをみことばを通してさらに深く教えてくださることを願う日々です。